広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語に生きている中国成語
Author(s)	張, 雲生
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1998 : 91 - 96
Issue Date	1999-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039393
Right	
Relation	

日本語に生きている中国成語

張雲生

1. はじめに

故事とか成語とか言うと、いかにも古くさいと思う人もいるだろう。新しい時代に向かって生きる若者には必要ではないという人もいるかもしれない。しかし、何か始めようとするときや迷路に迷い込んで決断を必要とするときには、これまでの経験をもとにして打開の道を探ろうとするだろう。だが、自分一人の経験した範囲は僅かなものである。そこで、視野を広げて他の人の経験からも学ぼうとする時、長い年月の間に語り継がれてきた故事や成語が、多くの人の知恵の結晶であり、それ故、今も生命を保っていることに気がつくだろう。

現在日本語の中で使われていつ成語はもとを探ると中国の古典中に散りばめられて成語故事にたどりつくことが多い。なかには中国の成語のままで使われているものもあれば、形や意味が変わったものもある。ここではそういう日本語の中にいきている様々な形で中国成語を研究したいと思う。

2. 成語とは

中国の古い文章、つまり、いわゆる漢文を読んでいると、主として漢字4文字からなる「決まり文句」とも言うべき表現がよく目につく。たとえば、「四面楚歌」、「朝三暮四」といった類である。このような言葉は中国の古い文章に限らず、現在の人の書く文章にもしばしば用いられており、話し言葉でもよく使われる。この種の言葉を中国語では「成語」という。

「成語」の意味は文字通り「すでに一定の表現ができあがっていて、一定の意味を有する語」の意味であるが、「成語」のより詳しい概念をその由来や機能などに基づいて定義するならば、「書物の記載や歴史的事実、あるいは、口頭による伝承などに基づき、多くの人々に習慣的に一定の形で引用され、一定の意味を伝達する語句」ということができるだろう。

3. 成語のかたち

成語は漢字四字を主に、三字あるいは五字から成り立ち、派生した意味を含めて、決まった表現であり、かつ文語的であると言える。また、漢字も並べ方に特徴のあるものが多い。

(ア) はめこみ型

はめこみなどという妙な表現を使ったが、この型に分類できるものが成語の相当な部分を占める。この方はさらに細かく分けられる。たとえば、「徹頭徹尾」、「鬼頭鬼脳」、「一心一意」、「自言自語」、「不知不覚」など、一字目と3字目に同一の文字が来る。そして、二字目と四字目が「頭尾」のように逆の意味のもの、あるいは「心」「意」のように似た意味のもの、あるいは「頭脳」「言語」のように一語に還元できるものがまずあげられよう。はめこみという言葉を使ったのは、この一語に還元できるものに焦点を当て、その前と真ん中にはめこまれる文字があるという発想からである。

次にあげられるのは二字目と四字目は同じように似た意味か、一語に還元できる言

葉であるが、はめこまれる言葉が、たとえば「一清二楚」、「千方百計」、「提心吊胆」、「咬牙切歯」、「四面八方」のように、似てはいるが違った表現になっているもの。

第三に「翻来覆去」、「形左実右」のように、一字目と三字目、あるいは二字目と四字目が似ているか、逆の表現になっているもの。以上の三つがあげられる。

(イ) 並列型

この部類に入る成語は少ない。「多快好省」、「切磋琢磨」などがあげられる。動詞あるいは形容詞がずらりと並んだ形である。

(ウ) その他

いわゆる熟語形である。「狼狽為奸」、「朝気蓬勃」など、これらはすべて言葉、述語の形である。「狼と狽が奸を為す」のであり、「朝の気が蓬勃としている」のである。また、「津々有味」、「自力更正」など、前の二字が後を修飾するものもあれば、「独立自主」、「乱七八糟」のように文語表現とは言えないものも若干ある。

4. 日本語の中の中国成語

ア. 日本でも中国でも同じように使う成語

・「四面楚歌」

成語の中には、この「四面楚歌」のように中国の歴史上の事件に関係する「故事」に乗っ取った、その事件がなければ成立しないものが一部にある。「四面楚歌」の故事はよく知られているが、簡単に述べておく。中国の春秋時代、その項羽が垓下の地で漢の高祖の軍に包囲されたとき、夜、四方の漢の軍中から楚の歌声があがるのを耳にし、実は高祖が漢の兵士たちにわざと歌わせているとはしらずに、それが降伏した楚の人たちの歌声と思いこみ、すでに楚のほとんどが漢に降伏し、自分は孤立無援になってしまったと嘆いたという故事。転じて、周囲すべてが敵や反対するものばかりで、、助けてくれるものもなく、全く孤立すること、または困難で行き詰まった状況に陥ること。

・「竜頭蛇尾」

頭は竜のように力強く、立派だが、尾は蛇のようにみすぼらしいという意から、はじめは勢いがいいが、終わりになるとふるわないことのたとえ。また、始めがあって終わりがないたとえ。

・「汗牛充棟」

書物が多くて、車に積んで動かせば牛も汗をかき、また積み上げれば家の棟木に届くぐらいであるということで、蔵書の極めて多いことを形容する。

日本でも中国でも同じ意味に使う成語には上にあげた「四面楚歌」、「竜頭蛇尾」、「汗牛充棟」以外に次のようなものがある。

「百発百中」、「百戦百勝」、「才子佳人」、「誠心誠意」、「赤手空拳」、

「大器晩成」、「大義滅親」、「富国強兵」、「各個撃破」、「厚顔無歯」、
「虎視晩成」、「画竜点睛」、「間不容発」、「驚天動地」、「鶏犬相聞」、
「九死一生」、「急転直下」、「空中楼閣」、「梁上君子」、「良薬苦口」、
「臨機応変」、「論功行賞」、「明哲保身」、「南船北馬」、「千軍万場」、
「千辛万苦」、「千言万語」、「弱肉強食」、「三位一体」、「砂上楼閣」、
「生殺与奪」、「深謀遠慮」、「四分五裂」、「四通八達」、「速戦速決」、
「唯我独尊」、「温故知新」、「夜郎自大」、「一敗塗地」、「一長一短」、
「一刀両断」、「一挙両得」、「一刻千金」、「一目了然」、「一視同仁」、
「再三再四」、「有名無実」、「愚公移山」、「自給自足」、「自由自在」
など。

イ. 日本と中国で一部分表現の違う成語

・「合従連衡」　→　「合纵连横」

一般に、離合集散するさまを示す。戦国時代の半ば（紀元前四世紀後半）に、まず蘇秦が燕王に進言した。強国秦に対して、燕・趙・斉・魏・韓・楚の六国が縦に、つまり南北に手を握りあって抵抗しようという「合従」と、同じ鬼谷先生の同門である張儀が、後に秦に入って蘇秦の説得で「合従」している六国を切りくずすために進言した「連衡」、一秦が六国のどこかと同盟を結び、「遠交近攻」の策で、六国をバラバラにし、軍事、あるいは外交上の圧力をかけて、秦に臣下の礼をとらせ、やがて併呑するという故事からである。ここの違いは「従」と「纵」、「衡」と「横」。縦という意味では、中国語は「纵」を使い、「衡」も「横」もいずれも「heng」という発音だが、「衡」はよこという意味に用いなくなっているから、「横」としたのである。従ってこの言葉については、ただ用字上の問題だけと言える。

・「不俱戴天」　→　「不共戴天」

仇敵とは同じ天の下で生活しない。仇恨の極めて深い形容。ものの両立しないたとえ。左の日本の「俱」も、右の中国で使う「共」も、意味は同じだが、どういういわけかこういうならわしできている。出典と言えるのは、「父之仇、弗與共戴天。・・・」《礼記・曲礼上》　父のかたきはともに天をいただいてはならない。従って必ず殺すべきである、という意味。「與共」という「戴天」を修飾している言葉が、日本では「俱」、中国では「共」となって定着してきているわけである。

・「東奔西走」　→　「东奔西跑」

忙しくあちらこちらに走り回ること。この言葉は、「走」が中国語では「歩く」という意味に転化してきたからだと思うが、それが「跑」にとって変わっただけで、意味は変わらない。

このように、よく似ているが少し違うところがあるもの。以上にあげた三つもほかのをあげてみると、

「半死半生」→「半死不活」、　「不老不死」→「長生不老」
「多情多感」→「多愁善感」、　「附和雷同」→「随声附合」
「堅忍不抜」→「坚韧不拔」、　「間一髪」　→「千钧一发」

「三拝九拝」→「三拝九叩」、　「捧腹絶倒」→「捧腹大笑」
「優柔不断」→「优柔寡断」、　「本末転倒」→「本末倒置」
「不偏不党」→「不偏不倚」、　「公平無私」→「大公无私」
「意気揚々」→「得意扬々」、　「飽食暖衣」→「丰衣足食」
「古今東西」→「古今中外」、　「日常茶飯」→「家常便饭」
「大言壮語」→「豪言壮语」、　「千載一隅」→「千载难逢」
「三面六臂」→「三头六臂」、　「山紫水明」→「山清水秀」
「四方八方」→「四面八方」、　「鉄心石腸」→「铁石心肠」
「雲散霧消」→「云消雾散」、　「異口同音」→「异口同声」
「奇想天外」→「奇想天外」、　「自己矛盾」→「自相矛盾」
など

ウ. 日本では中国と同じように使わない成語

・「朝三暮四」

猿使いが餌のとちの実を朝は三とし、暮れは四としようといったところ、猿が怒ったので、朝四、暮れに三つとすることで納得させたが、全体の数は変わらないので、算数に弱い猿をうまくなだめた故事。中国ではもとはうまい話で人をあざむきだます意味に用いたが、今は変わりやすく一定しない意に用いる。日本では昔の意味のままで使われている。

・「薪を抱きて火を救う」

薪を背負って火を消そうとする。災害を除こうとして、誤った方法を用いたため、かえってその勢いが増し被害が拡大するたとえ。日本ではわざわざ燃えやすい薪を背負って火事場に赴くという意から、自ら好きこのんで災いをこうむるようなことをするたとえになっている。上の「朝三暮四」と違って、逆に日本での意味が変わったと言える。ほかにも「粉骨砕身」、「換骨奪胎」、「右顧左眄」などがあげられる。

エ. 日本で使うが、中国では使わない成語

この類の成語は大きく二つに分けることができる。一つは日本でできたものと思われる和製成語。一つは中国の出典があるが、日本だけに残り中国では消えるか、ほかの意味に変わったりしたもの。

(A) 和製成語

・「一生懸命」

封建時代、主君から賜った一カ所の領地を生活のよりどころとして大切にし生命を守ることから、物事を命がけでやること。真剣に物事をすることのたとえ。出典として、<<保元物語>>に「情を懸け賜うべき頭殿は敵なれば今は定めて一所懸命の領地もよもあらじ。」とある。また、<<太平記十一・五大院右衛門の条>>に「一所懸命の地を安堵仕る様に御吹挙に預かり候はん」とある。

・「絶体絶命」

体も命も窮まる意から、どのようにしても逃れることのできない追いつめられた立場、状態にあること、進退窮まること。完全な「はめこみ型」を取り、形として成語の条件を備えているが、中国語にはない。

・「我田引水」

自分に都合の良いように取り計らったり、振る舞ったりするという意味でよく使うが、この言葉、中国語の文法に従えば、「引水我田」と場所を示す「我田」は動詞の後に来るべきで、この点からも和製であることがはっきりすると思う。

後、「自業自得」、「一切合切」、「無我夢中」なども和製成語である。

(B) 中国にかつてあったもの、あるいは意味が変わった成語

・「正正堂々」

<<孫子・軍争>>に「無向正正之旗、勿擊堂堂之陣。」(正正の旗をむかうるなかれ、堂堂の陣を撃つなかれ)という言葉がある。この成語の出典はここにあると思われる。整然と並んだ軍旗、いかめしく立派な陣立ての意から、軍の陣容が整い勢いの盛んなさまを言う。また、手段や態度が正しく立派な意味で日本では使われてきた。中国も昔成語として定着したのかもしれないが、今では使わない。

・「粒粒辛苦」

この言葉は日本語では、物事を成し遂げるために絶えず努力を重ねるという意味で使われる。ところが出典は違う。「・・・誰知盘中餐、粒粒皆辛苦。」世間で日常食べている飯の一粒一粒はみな農民の汗の結晶であるということを教えてくれた唐代詩人、李紳の<<農を憫れむ詩>>である。中国ではこの詩文のまま「粒粒皆辛苦」のままで使われている。したがって、この成語は日本で意味が変わって定着したものと言えよう。

・「是是非非」

「是」は正しい、善い、「非」は悪い、よくないの意。正しいことは正しいと認め、悪いことは悪いと判定し、すべてについてかたよりのない立場で善悪を判断すること。「是是非非」という言葉は日本ではこの意味に使う。ところが中国ではいつの間にか「正しいもの、間違ったものすべて」という意味に転化してしまっている。上にあげた三つのほかに「五里霧中」、「言語道断」、「一心不乱」などもこの類の成語に属する。

5. 終わり

日本語は便利な言葉があって、外国語を自由に取り入れて自分のものとすることができる。日本語の中にカタカナ語が氾濫するのは、もとの国の言葉を日本語にそのまま取り入れた結果である。現代は横文字の国との交流が盛んなため、こうした現象が見られるが、明治維新以前はもっぱら中国と交流をしていたので、中国語が日本語として通用していた。そのため、成語は中国に起源を持つものが非常に多い。そんなもともと中国のものである成語は日

本語の中で少しずつ変わっていく。日本人自分の成語になっていく。

参考文献:

成語林　故事ことわざ慣用句　[監修]　尾上兼英
中国成語辞典　井島徳
中国故事成語大辞典　東京堂出版　和泉新○佐藤保一編
中国成語熟語辞海　学苑出版社